

ある人冬の初めつ方にいとはかなく病ひづき、久しくも患はでその年のうちに失せにければ、遠方に散らばりたる子供らは何の心の準備もなきをとあさましく呆れ惑ひつつ、仕事何くれうち置きて病院の安置室に急ぎ駆けつけたり。

日頃とり分き言ひ置きたる事もなかめれば、父の葬儀と同じき様にと長兄采配するに、かかる物なむ引き出しの奥にと遺品整理のさ中に測らざる見つけ物、集まりて見れば何やら遺書めきたる文一通、白き封筒の上書きには子供らへと確かに母の文字、少なき遺産は皆で分けよ住む人なき家はよしなに處分せよとこまごま書きたる末に、通夜葬式は一切執り行ふまじく、近き身内ばかりにてよろづのことしめやかに始末すべし、義理のみの人にはかけてな知らせそ、また母の骨は成る丈遠き海に撒き、菩提寺の墓には塵一つ入れたまふなこれ必ず守りたまへと、いかなる了見にてか文字太に幾度も幾度も繰り返したるを、うち返し見つつ五人の兄妹は顔見合せて暫し言葉もなかりけり。

我ら幼きより良妻賢母の名高く、近所の褒め者なりし自慢の母、ひい祖母様をはじめ三人の老人病院にも入れずこの家に看取りて、また父とはおしどり夫婦と評判の、口喧嘩一つせず仲良さげに見えたりしものを、さては如何なる鬱屈の胸に宿りて最期の最期にかかると遺言残しつらむ、菩提寺の墓に入れたまふなどは母らしくもなき非常識、さばかりの歳にもあらぬを少し呆けたりしにや、かかる口うるさき田舎にてさる勝手の許さるべきか、代々の家柄に傷もこそつけと男どもは非難するに、女ばらは指を立てて、代々の家柄とは笑止やな、ど田舎ど田舎と馬鹿にして、長子の務めも果たさず卒業早々に夜逃げ同然都會へ雲隠れせしはどこの誰、祖母様ご健在の頃なれば、あれをばネタに嫉妬しと随分母さんは苛められしぞ、盆暮れも歸り來ず金の無心のみに便りおこするを、破り棄てよと父さんの怒鳴り聲がなり聲今も耳から離れぬはと姉妹して兄に詰め寄りぬ。

兄も負けじと立ち上がり、若氣の至りにさる振る舞ひの少しありもやしけむ、跡取りなれば跡取りなればと物心つきしより婆さん連中に厳しくしごかれ、欲しくもなき特別膳強ひられ些か弱音吐けば鐵拳食らふ恐ろしさ不自由さ、ぬくぬく育ちし汝らの思ひ知るべきものかは、縁故なき都會に出でては身一つに働き小さながらも家建てて、末廣がりに家系絶やさずあるも一つは長子の役目、姓繼がぬ女づれにとやかく言はるる覺えなきをやとそつぽ向く。

お鉢の回り來るかと思ひけむ、昔よりお調子者の次男は早速兄姉の間に分け入りて、まづまづ姉さんも思ひ見てよかし、戦前ならいざ知らず男女平等のこの世に跡取りも總領もなきものを、繼ぎたしと思ふ者あらば繼ぐもよし守るもよし、隣の分家も二代續けて婿取り養子、兄さんばかり責めずと我この家守らむと思ひなば婿迎へてもよからましをと口さし挟めば、この氣性の荒きに億萬積まるるとて婿入りする者あべいかは、婚期逃してやうやう後妻話に納まりながら半年持たで離婚しつるは我に勝りて親不孝ならずやと長兄の冷笑する、と言へばかく言ひかたみに口汚く罵りながら母の棺圍み年甲斐もなき兄妹喧嘩、やうやう夜の明けなむとするに驚かされて、この續きはまたの機會に今はひとまづ葬儀の準備とおのおのあたふたと腰上げたり。

男は表方女は奥向きの用事と役割分擔してかたがたへ立ちあかるるに、ありつる遺書發見せし末の妹引き續き遺品整理するほどまたもや何か見出でけむ、姉さん姉さんと臺所の姉たちを呼び、見よかし此の背負ひ籠かかる物なむ北の部屋にありつるは、野良仕事やめ

て久しくなりぬるにいかでかかる物取り置きけむ、かく古びたるものと編み目の所々やれたるを撫でさすりつつ見すれば、上の姉も火を止めて覗きこみ、いみじき古物引き出でつるかな何ぞの役に立つかと隅にうち置きたりしにや、さるにてもかかる破れ籠物入れの代はりにもならじをと顔顰めて觸れもせず。

此れな母さんの寶の籠ぞ、寶籠とぞ母さんは呼びしや、赤子の時分この籠に揺られて畑にも山にも連れゆかれしを忘れつつるか、我は手引かれて歩きしかば籠の汝らが羨ましかりきと長姉は懐かしげに手を伸ばし、祖母様お達者の頃は厳しくて財布の紐の固かりしかば、小遣ひ稼ぎにと畑の隅に季節の花植えこの籠にて運びきや、母さんの花は葉も形良しとて直賣所にては人氣なりしぞ、我も百合やら小菊やら手傳ひて束ねし記憶あるはと珍しき昔語りに次姉も少し聲音落として、さることもやありけむ我は學校の鞆も體育着も姉さんのお古ばかり回り來るが切なかりしに、たまには新しき洋服買うてよやと母さんにせがみてもその内その内と流されて、あまり悔しかりしかば或る時この籠思ひ切り蹴飛ばし中の野菜やら花やらぶち撒けてしことあり、當然祖母様からは大目玉、夜まで物置に閉じ込められてお八つも夕飯も抜きなりき、母さんは強くも叱らずまたの日例の夕方遅く歸り來てこの籠下ろし、黄色のリボンをぞそつと取り出だしてける、直賣所邊りの露店にて買ひもやしけむ、かく結はば可愛らしなと鏡臺の前にて髪に巻ひて呉れしはや、あのリボン如何になりけむ姉さんに見つからじと箱の奥に隠ししまま見出でずぞなりにしと少し恨めしげなり。

そよや我にも覺えあり、朝市の日は母さんのいつ戻り來るかと待ち遠しくて、友達とも遊ばず畑の邊りウロウロして必ず出迎へせしをや、姿見つけて驅け寄るに空つぼの籠の底見せて、今日は花の高く賣れつるはと嬉しげに、甘きクリームパンなど買うて呉れしを畦道にて食べしが忘られぬ、思ひ出のある籠なればかくポロポロになりても捨てかねてや持たりつらむと目を伏せしんみりと、記憶次々と呼び起こされてあの時この時と我先に語るほどに氣の強き長姉までいつしか涙ぐみぬ。

祖母の叱責父の怒聲子らが不平不満の的となり、日々辛く思ふこともありけむをつゆ面に出ださず黙々とこの籠擔ぎて、少し猫背氣味に歩く母の姿の今更ながらに甦るを何ゆゑ今までうち捨てて顧みざりつらむ、墓に布團は着せられず、今となりては最期の願ひだに叶へさせたし、海への散骨兄たちは非常識ともちるねど多數決なら我らが勝ち、この遺言だに必ず守るべしと姉妹は籠をかき撫でて心ごころに、

たらちねの 母のしよい籠 久しくも うち捨てられき 負ふ人なしに

夜もすがら 語り明かして ストープに 薪をくべれば 亡き人思ほゆ